



Man IV (From the Series Inughuit), 2002

Tiina Itkonen



Iceberg II, 2006

■ グリーンランドとの出会いを聞かせてください。

イトコネン まだトゥルクの大学にいたころに、卒業制作で訪れたのがグリーンランドとの最初の出会いですが、その前に「海の母」の本を読んだのが始まりです。

■ どんな話なんですか？

イトコネン 親の定めた男と結婚することになっていた娘が、それにそむいたために海に放り出され、ボートに戻ろうとしてあがいたときに切り落とされた指が、海に沈んで動物になったという哀しい話です。これを読んだあと、大学でグリーンランド出身の友人ができ、彼女を訪ねて首都のヌークへ行きました。

■ 最初は現地の人のポートレートを撮っていましたね。

イトコネン 昔ながらの暮らしをする人たちが、どのように生きているのか、この目で見たかったんです。友達とヌークで別れ、北のカーナックという村に向かい、そこからさらにボートでシオラバルクという世界最北端の村に行きました。人口70人足らずの村で、現地の人の勧めで、たまたま家を留守にしていた獣師の家に泊まりましたが、だれも知り合いがおらず、言葉もまったく話せなかったのが最初は苦労しました。でも、若い女性がひとりでこんなところにいることを怪訝に思ったのでしょう。村人が家に招いてくれるようになり、写真を撮らせてく

アイスバーグは生きている変わりゆく風景を永遠のものに

Tiina Itkonen

グリーンランドの神秘なる光に魅せられて14年。

地球の果てで、たったひとりアイス・フィヨルドと対峙するティナ・イトコネンが求めるものとは？

取材・文=伊東豊子

れるようになりました。結果的には良かったですが、さすがに最初の旅のときはたいへんで、もう二度と行くまいと誓ったんです(笑)。

■ しかしその3年後、同じ村に再び行ってますね。その後も何度も。

イトコネン 忘れられなかったんですね。あの村で出会った人たちと、あの景色、あの静けさが。

■ 滞在中は毎日写真を撮っているんでしょうか？

イトコネン いいえ、ほとんど撮りません。ただひたすら歩いて、たくさん考えます。

■ ヘルシンキ・スクールの写真家は、技術や制作方法に凝ったものが目立ちますが、あなたの作品はストリートですね。**イトコネン** やろうと思えば凝ったこともできますが、あの景色とアイスバーグ(氷山)さえあれば何もいらななんです。こればかりは自分で見ないとわかりませんが、想像を絶するほど美しいものなんです。それにあそこは私にとって、写真の対象を超えて自分がリラックスできる癒しの場でもあるんです。ヨガに通うのと似ています。毎日同じ場所に行つて、朝から晩まで一日中ボートと風景を見ているあの幸福感。朝・昼・晩、靑空・曇り空と違う光で同じ風景を繰り返し見られるぜいたくさ。そういう時間を過ごしているうちに、だんだん写真を撮りたくなります。

■ ここ数年、ユネスコの世界遺産に認定されているイルリサットのアイス・フィヨルドを撮影していますね。

イトコネン あそこは私の好きな場所です。ビルよりも大きな氷山がたくさんあって神秘的です。しかもひとつひとつがユニークで、行くたびに少しずつ向きが変わって「ああ、生きている。氷山にも命がある」と感じるんです。ここから流れて解けるまでニューヨーク付近まで4,000キロも旅をするものもあるくらいです。

■ 深刻化している地球温暖化の影響が気になりますね。

イトコネン いつかあの氷山がなくなってしまうかと思うと悲しいです。あそこは、一度行ったら必ず戻りたくなる場所です。氷山が浮かんでいる姿がシュールで、建物や木など視界を遮るものがなくて、水平線と地平線がどこまでも続いている。あの美しさを伝えるために写真を撮っています。私があそこに戻るのはいつか消えてしまうかもしれない風景を記録にとどめたい、という気持ちがあるからかもしれません。

ティナ・イトコネン
1988年ヘルシンキ生まれ。2002年にヘルシンキ芸術デザイン大学写真学部を卒業。2003年に若手写真家賞を受賞。染井本教授・レジデンス・展示経験多岐。写真集に「Inughuit (Inuits) 2004年」がある。